

आयूस: あーゆす

(発行) 京都文教大学図書館
京都文教短期大学図書館/京都府宇治市槇島町千足80

❖❖❖本当に本当? ❖❖❖

京都文教短期大学図書館長

幼児教育学科・教授(教育学) 越後哲治

最近あまり聞かなくなったが、2・3年ぐらい前までは、学生さんに何か新しいことを話すと、「うっそー」という返事が返ってくるのがよくあった。人間不信の産物かと疑いたくなったが、親しい者同士でも使われていたので、そうでもないらしい。「うっそー」の意識が真実を求める意欲の表現であるとすれば、この姿勢は健全な精神の働きの表れとも言えよう。

真実を求める意欲を失い、支配者、指導者に黙って従う姿勢は指導者の独裁を招きやすく、ひいては国民皆に同じ考えをもつことを要求する全体主義になる恐れがある。この場合、指導者が道を誤れば、国民全体が道を誤り、悲劇に至ることも、過去の歴史が示している。

振り返って考えれば、学問の歴史は真実探求の歴史であり、学問の使命は真理の探究にあると言われる。古代ギリシアのソクラテスは、命がけて真理を求めて闘ったことで有名である。当時の知識人ソフィストたちが(ドクサと言われる)表面的な知識で満足していたのに対して、ソクラテスは根拠ある知識を徹底して求め、その方法が「ソクラテスの産婆術」と呼ばれた。その対話の結果、ソフィストたちは真の意味で無知であることに気づいていないが、ソクラテスは自らがまだ無知であることを自覚していることが判明した。いわゆる「無知の知」である。ソクラテスは、彼を快く思わない人たちに訴えられて、死刑の判決を受け、その判決を甘受したのである。

真実を求める闘いは決して昔話ではない。昔か

ら今日まで、真実が知られることを不都合とする人たちは、真実を隠そうとし、場合によっては弾圧も行われる。

真実だと思われていることでも、後から真実でないことが判明することがある。かつてヨーロッパでは天動説が真実と信じられていた。コペルニクスやガリレオなどによって天動説が否定され、地動説が真実となった。今日でも教科書に書かれていることを真実と信じている人も多いと思われるが、教科書の誤りも指摘されることがある。

事実が明らかでも、その事実の解釈が人によって異なる。間接的に伝えられる事実がそのまま正しいとは言えない。そこから解釈学という学問も展開されている。

同じ事実について国内のいくつかの新聞報道を見れば、微妙にあるいは場合によっては大きく、見解が異なる。国家や民族の違いにまで広げれば、この見解の相違は国際紛争にまで拡大することがある。

さらに真実の解明にとどまらず、真理の探究となると奥が深い。真理とは真正の理であり、物事の正しいあり方、人間の正しい生き方が問われる。例えば、真実を語ることが人の心を傷つけることもある。真実を踏まえつついかに行動すべきか、このことは科学を超えて、道徳的・宗教的次元にまで関係するのであり、絶えざる人間の成長が求められる。

(えちご てつじ)

*** 古い本について ***

前京都文教大学長

名誉教授（臨床心理学、精神分析学） 鑪

幹八郎

本を購入するということについては、なんでも関心のある本が出版されるとつい買いたくなるところがある。家の中にもうずたかく本が積まれている。「積ん読」というのも相当な量になっている。何で本を身近に置きたくなくなってしまうのだろうか。邪魔だと思ったり、面倒だと思ったりすることも少なくないが、やはり本を購入するという意欲には、あまり変化はない。

私の学生時代は本を購入することが難しかった。ことに専門書（私の場合は心理学）が難しかった。お金もなかった。本は高価だった。ことに外国からの購入となると、高価なばかりでなく、購入するまでに時間がかかった。手に入るのに一ヶ月以上もかかってしまう。

しかし、他に方法もなかった。新しい領域を研究し、しかも丁寧に読むとすると、どうしても赤線を入れたり、感想や注書きをしたりしたくなる。図書館の本を汚したりすることはできない。コピー機などもない時代である。結局は買うことになる。欧米の雑誌などは、手書きで書き写したことも度々あった。江戸時代の蘭学書を学生たちが書き写していたようなことが、戦後のしばらくは続いていたのである。

最近、本の整理をしていたら、ひどく傷んだ本が出てきた。購入の日付を見たら1964年とあった。今からちょうど50年前の本である。丁寧に読んでいた。ぼろぼろで頁がばらばらになりそうなところをセロテープのようなもので接着してい

る。中には、書き込んだり、注を入れたりしている。その個所を読み直して見ると、一応読んでいることが分かる。

50年前の本が、日進月歩の現在にも役に立つのだろうか。そんな疑問もあるだろう。技術系のものや、医学系のものとなると、古い本は「そんなこともあったなあ」という歴史的な価値しかないかもしれない。しかし、本も、ものによっては、基本的にあまり時代に左右されないものもある。何千年経っても仏典は変わらない。聖書も変わらないだろう。哲学の世界も変化が少ない。学問の世界も変化するものと、あまり変化しないが深まるという両面があるのではないだろうか。本の世界も、瞬間、瞬間に生きるものと、あまり変化しないで価値のあるものがあるのではないだろうか。

赤線や注を書き込んでいる自分の古い本を前に、そんなことを考えていた。

（たたら みきはちろう）



🌸🌸🌸 「コミュニケーション能力」が求められる不思議 🌸🌸🌸

ライフデザイン学科・教授（コミュニケーション論） 森川 知史

経団連が会員企業を対象に「2013年の学生採用時に求めた能力」を尋ねているが、1位は「コミュニケーション能力」の86%で、前年調査より4ポイント増えて過去最高になったという。「コミュニケーション能力」の必要性が頻りに言われるようになって、就活中の学生たちが自分のコミュニケーション能力不足に怯えるようになったという話も聞く。

でも、採用側の企業に「コミュニケーション能力」についての確かな認識があるとも思えない。企業の研修会に講師として呼ばれることも多いが、そこで「コミュニケーション能力」というのは何かを幹部候補生たちに話すと、「そういう話は我々よりむしろ上層部にしてほしい」と言われることがよくある。つまり、「コミュニケーション能力がないのは、我々若手幹部候補生よりむしろ上層部の方だ」というのだ。

何やら「コミュニケーション能力」なるものが必要だとみんなが思いながら、肝心の「コミュニケーション能力」が何を意味するのかが分からないまま、という状態が続いているようだ。

テレビの討論番組などを見ていると、有識者と称される人たちが出てくるが、彼らは自分の主張を述べることに汲々としていて、相手の話に耳を傾けようとしない。制限時間のある番組で熱心に耳を傾けていたら、一言も喋らないまま番組が終わってしまうから、ひたすら自分の主張をまくし立てることになる。

でも、元来、コミュニケーションの基本は、互いを認め合い受け入れることからしか始まらない。「コミュニケーション能力」の高さは、聞く姿勢で計られるべきものではないか。相手を認め、受け入れ、聞く、ということができて、ようやく相手の理解が可能になる。聞く姿勢をもたず、受け入れようとせず、認めない状況で、どうしてコミュニケーションができるだろう。

尤も、この聞く姿勢で相手と向き合うというのは、なまやさしいことではない。相手のことばが出ないときには、じっと我慢して待たなければならない。いくら待っても出ないなら、出るまで関わり続ける覚悟が必要だ。そして、出て来たことばについても、ときには聞いていないふりが必要だったり、聞かなかったことにすることが求められる場合さえある。つまり、聞く姿勢で向き合うというのは、相手に常に寄り添うということではない。だとすれば、そんなことは多くの場合不可能だろう。時間に追われ、立場や状況の異なる者同士が聞く姿勢で向き合えるはずもない。

無論、「聞く姿勢に少しでも近いことが求められている」と言えればいいのかもしれない。でも、そこまで分かっている方がいいけれど、そうではなく、とても聞く姿勢など示し得ない状況だからこそ、「コミュニケーション能力」が希求されているということなのではないか。「コミュニケーション能力」は求められ続けながら、でも、その能力をほとんどの人が手に入れられない、ということなのではないか。

かつての村社会のように、村人全員のライフスタイルが似通っていて、年中共同作業が求められていた時代とは違って、そのライフスタイルも価値観も多種多様な都会生活でのコミュニケーションは容易ではない。「聞く姿勢」の重要性はいくら強調しても強調しすぎることはないのだが、それをいくら丁寧に説明しても、そしてそれを理解する人がたとえ増えても、そんな姿勢で人と向き合うことが容易ではない今の社会のありようを変えられないかぎり、この「コミュニケーション能力」が求められるばかりで「豊かなコミュニケーション」が実現し得ない現実は、どうにもならないように思える。

（もりかわ としふみ）

🍏🍏🍏 私のすすめる3冊（私の推薦図書） 🍏🍏🍏

食物栄養学科・講師（給食管理） 坂本 千科絵

◎ 『10品でわかる日本料理』

高橋拓児 著／日本経済新聞出版社

この本では「日本料理を楽しむ」というスタンスで、日本料理の骨格となる10品の料理に基づいて解説している。いつものご飯をもっとおいしく味わうために知っておきたい和食に関する話が、材料・調理方法以外にも包丁や器、焼き物用の炭に至るまで詳しく、また、わかりやすく説明されている。特筆すべきは本書最後のコラムである。著者の営む料理店に社員が入社した時に話す「料理人一年生がまず目指すべきこと」は、料理人に限らず社会で活躍しようとする学生全員に読んで欲しい。

◎ 『地球の歩き方（どの国でも）』

地球の歩き方編集室 著・編／ダイヤモンドビッグ社

海外旅行のガイドブック＝「地球の歩き方」というのは、一昔前（？いやもっと??）に大学生であった私に取っては常識であった。現在、海外旅行の情報はインターネットで集める方が主流なのかもしれない。しかし、インターネットの情報というものは欲しい情報のみが手に入り、他の関連情報は何も手に入らないのである。目的地以外の観光情報や安全対策などの周辺情報を読みながら旅のルートを何度も考え、旅に出るまでのワクワク感を楽しむのは「地球の歩き方」で、直近の交通情報、イベント情報などはインターネットで、これが私の旅行スタイルである。

◎ 『僕の死に方 エンディングダイアリー500日』

金子哲雄 著／小学館

テレビの情報番組で「デジカメを買うなら不人気の色を！」などニコニコ笑顔でお買い得情報を話していた著者が40歳の若さで突然余命宣告をされる。余命宣告を受けた著者は「命の始末」と向き合い、そして臨終を迎える。そんな中でも自分は「生涯無休」だと言い、最後まで自分に正直に生きてきたことを誇りに思うと言える。彼のパワーの源は何だろうと考えさせられる本である。また、本書と同時に「金子哲雄の妻の生き方 夫を看取った500日（金子稚子 著／小学館）」も読むことをすすめる。

（さかもと ちかえ）

私には小学校の頃から、続いている趣味がある。スキーと電子工作である。

今まで小遣いのほとんどをこの2つに使っている。それぞれ、小学生からの付き合いだから、かれこれ50年近くになる。子育て、仕事、そして小遣い不足で、多少のブランクはあるが、今までこの趣味は続いている。ここでは電子工作の話。

小学校の時から勉強は嫌い、でも親の影響か本は読んでいた。特に井伏鱒二訳『ドリトル先生シリーズ (13巻)』が大好きで、小学校の図書室に通い熱中していた時期があった。この本はその後、社会人になっても全巻購入し読んだ(今となれば差別表現が満載だが)。特にノアの洪水の時代から生きている亀のドロコの話『ドリトル先生と秘密の湖』が好きだ。そんな小学生が図書館で偶然、手に取ったのが『子供の科学』。『学研の科学』ほどお勉強臭くなく、男子小学生が好きそうな科学記事の多い雑誌だ。その中に毎月、小学生の小遣いと技術でも作れる、実体図付きの電子工作が載っていた。当時の電子工作は、今のICできるように、それ自体が回路として完成されているのではなく、1つ1つの部品をハンダ付けて作るのだ。

秋葉原には時々、父に連れられ交通博物館や家電製品を買いに行っていた。その時に駅の高架下の狭い路地に、間口一間の怪しげな電子部品屋が連なっていることは知っていた。今でも、同じようにラジオデパート、ラジオセンター、ラジオストア(昨年解散)として営業している。その時には自分が、その後、半世紀近く通い多額の小遣いが、秋葉原のパーツ屋で吸い上げられるはめになるとは想像だにしていなかったが。

その『子供の科学』にゲルマニウムラジオの製作記事があった。部品のかっこ良さ、自分でラジオを作ることなど、好奇心旺盛な小学生を惹きつけるのに、十分な力強さがあった。しかし、すぐには足が動かなかった。私にとって、あの狭い怪しげな路地のお店へ、1人で行くだけの勇気が無かったのだ。

ついに小学校の5年の夏休み、一大決心をして、初めてのお使いに秋葉原に向かった。今でもそうだが、路地のパーツ屋は専門店化しており、自分の欲しい物がどこで買えるかが分らない。店

主の中には愛想が悪く、素人を邪険にする店もあった。私は『子供の科学』を持って、ドキドキしながら必要な部品が、どこで買えるのかを聞いて廻り、店を捜した。たかだか、ゲルマニウムラジオ(10点ぐらいの部品)を作るだけでも、5、6店を廻らなければ部品が揃わない。当時のラジオ少年にとって、秋葉原のパーツ屋はマニアの大人の世界に感じられ、実際にそういう場所だったのだ。

買ったコイルはトリオ製で今のJVCケンウッド、可変コンデンサーはアルプス製、今は世界で名だたる電気メーカーが、まだ町工場だった頃の部品だ。その後も、もっと複雑な工作をするには、ある程度、自分で店の商品情報や電気知識を持っていなければ、秋葉原で部品を集めることは、至難の業だった。正直、必要な部品の全てが入手できれば、半分完成したも同然で、部品調達ができず諦めたことも多い。しかし、今はネット検索と宅急便で、購入が劇的に楽になった。今の課題は生産中止の部品が多く、入手に困難があることだ。

それでもラジオ少年になるための通過儀礼を何とか乗り越えた。家に帰って買った部品をハンダ付けし、初めて自分で作ったラジオのイヤフォンから、放送が聞こえてた時の感動は忘れられない。その後、読むラジオ雑誌もレベルアップし、中学の時に『初歩のラジオ』で短波受信機を作り、高校生では『CQ ham radio』となり、無線機を作り電波を出した。

今は古典真空管のアンプの設計製作、そして時々『トランジスタ技術』を買って最新技術の情報収集をして楽しんでいる。本学には電子工作、電子工学に関する蔵書はほとんど無いが、オンラインデータベースで日本全国の大学から借りることが出来る。ちなみに私は山形大、琉球大、国会図書館から絶版になり、古書でも出ない貴重な電子工学関係の本を、本学図書館を通じて借りた。今の図書館には壁が無いのだ。恵まれた環境である。

思えば図書館での出会いは沢山あるが、この『子供の科学』との出会いが無ければ、知識と技術、発見のある楽しい時を過ごせなかっただろう。図書館のお陰で生活を豊かにしてもらっている。幾つになっても工作は楽しい。

(すずき こういち)

☆☆☆☆ 初めての選書ツアー ☆☆☆☆

ライフデザイン学科Ⅱ回生 谷口綾香

きっかけは、図書館のスタッフの方に「選書ツアーというものがあるのだけど参加しない」と声をかけて頂いたことです。選書ツアーは、ジュンク堂へ行き、ある程度基準の設定はされるけれど、基本的に自分の興味のある本を自由に選んで良いこと。そして、その本を図書館にコメントを付けて学生選書として並べるといった内容でした。そのようなイベントがあると聞き私はぜひ参加したいと思いました。残念ながら前期の選書ツアーは、家が京都から遠いこと、授業をぎっしりと詰めていたことにより行けませんでした。そして後期、今度は参加がかない、参加できると分かったときはうれしくてわくわくしました。本好きの方なら選書ツアーの内容がわくわくすることがよりわかっていただけたと思います。

そして、選書ツアーが始まりジュンク堂の品ぞろえの豊富さを目の前にしてすごく幸せでした。本が好きな私ですが、自宅付近はこじんまりした本屋さん比較的多く、大体の本がどの辺にあるかを把握している中で選んでいたのも、ジュンク堂の種類が多さには驚きました。

本を選ぶにあたり多くの方に読んでいただきたいと思い、お店のおすすめ本やランキングが高くメディアにとりあげられたものから選んでみました。主に『美文字のすすめ』『話す力』『風の中のマリア』『結局、最後はコミュニケーションでございませう。』などです。本をあまり読まない人でもメディアに上がった本は興味を持ってもらいやすいこと、そして興味のある方には「図書館にある」と伝えれば読んでもらえると思って選びました。次に景色などの写真集を選びました。忙しくて時間がなくても、写真集なら遠くの国々の景色や滅多に見る事のない自然の美しさを数時間で味わえるからです。写真集を一度さらっとめくると綺麗で大変癒されました。次に、生活の参考になりそうな本を選び、ある程度かごの中に入ったのもうこれでいいかなと思いつつスタッフの方のところに戻りました。すると、「まだまだ行ってきていいよ」と声をかけていただけたのでさらに探し

続けました。次に選んだのは小説の分野です。私は小説などの物語が好きでつい夢中になり、気が付くとかごは本で一杯になっていました。こうして初めての選書ツアーは終わりました。

選んだ各々の本に、コメントを書くときは時間がかかり大変でしたが、自分の選んだ本がこんなに沢山図書館に並ぶこと、本を手にとってもらうことをイメージしながらコメントを考えていると、それは特別な時間になりました。本が棚に並んだ時は嬉しさとともに、他の参加された方の選んだ本も早く読んでみたいという衝動にかられました。

本が好きな方もそうでない方にも、一度本を手にとって見ていただきたいです。実は、私は小学校5年生辺りまで全くといっていいくらい本を読んでいませんでした。ある時、友達の読んでいた本の装丁が可愛くて何となく読んでみようと思ったのがきっかけでした。読んでみると面白くて、どんどんと他の本も読むようになりまして。大学生になってもずっと本が好きで図書館に通っています。何気なく読んでいると知らぬ間に時間が経っていたりするので、通学の時間や待ち時間などにもちょうど良く、また知らないことを知ることができるいい機会となります。本好きの方には、今回私が選んだ本の中で『書店員の恋』という本が一番のおすすめです。この本は、書店員が主人公で書店員の恋の行方が読んでいて面白くて、主人公の揺れる思いや葛藤に共感できます。一人でも多くの方に本に興味を持ってもらえると本好きの私としてはとても幸せです。

『美文字のすすめ』中塚翠濤 著／セブン&アイ出版、

『話す力』草野仁 著／小学館、

『風の中のマリア』百田尚樹 著／講談社、

『結局、最後はコミュニケーションでございませう。』響城れい 著／綜合法令出版、

『書店員の恋』梅田みか 著／日本経済新聞出版社

(たにぐち あやか)